

キトラ古墳壁画四神特別展示閉幕

飛鳥資料館では、今年の4月16日から飛鳥資料館開館35周年と平城遷都1300年祭を記念して「キトラ古墳壁画四神」展をおこない、5月15日からは壁画の実物を展示する特別公開をおこないました。今回の特別公開は、2006年から毎年続けてきたキトラ古墳壁画公開の集大成ともいえるものとなりました。

今年は、キトラ古墳の四神全てが初めて一堂に会する特別公開であったため、開催前から非常に注目度の高いものとなりました。そして、その中でも最も注目されたのは、初公開となる南壁の朱雀でした。高松塚古墳では確認することができなかったために、キトラ古墳の朱雀は極彩色壁画として国内で初めて確認されたもので、その朱色の美しい羽を広げた姿に魅せられた方々が多かったのではないでしょうか。

さらに特別公開の期間中は、お越しいただいたお客様に、より楽しんでいただくために様々なイベントをおこないました。毎週土曜日の夜には、飛鳥資料館の前庭にある須弥山石の中心として周囲にロウソクを並べ、さらに今年初公開となる朱雀をロウソクで浮かび上がらせました。すると、夕暮れ時には幻想的な風景が資料館の庭に広がり、普段とは違った雰囲気を感じていただけたかと思います。また、毎週日曜日には様々な催しがおこなわれ、飛鳥の食を体験するイベントでは餅つき大会をおこない、ご家族で参加していただくなど、大変な盛り上がりを



特別展示会場の様子

みせました。また前庭では、天平の古代衣装を着て記念撮影をするイベントをおこないましたが、これも大盛況で撮影待ちの行列ができたほどでした。そして、夕暮れ時には樺原市吹奏楽団やバンドによる演奏もおこなわれ、今回の特別展示に華をそえてくれました。四神同時公開に加え、このようなイベントの助けもあり、日本全国からたいへん多くのお客様にお越しいただきました。その結果として今回の特別公開では、これまでのキトラ展で過去最多入場数であった、2006年の白虎特別公開の来館者数6万人を上回る、約9万のお客様にご来場いただき、6月13日をもって大盛況の内に幕を閉じることができました。まさに、5年間におよぶキトラ古墳壁画の公開の集大成に相応しい展覧会であったといえるでしょう。

2006年から毎年春におこなってきたキトラ古墳壁画の特別展示ですが、今回で公開は一段落し、今後の展示に関しては現在のところは未定となっています。キトラ古墳壁画には、調査研究や保存修復、未公開の天文図や十二支の一部に関する扱いなど、まだまだこれからどのようにするべきか知恵をしばらくなければならない事柄が多くあり、今後の検討課題といえます。キトラ古墳壁画の四神や十二支を変わらぬ姿で、多くのお客様に1日でも早く御覧いただけるよう努力していきます。

(飛鳥資料館 成田 聖)



資料館でおこなわれた光の回廊